

2173再構築 11

ララの人物造形 3

エリー

生き物は自由なのか？

食べなければ死んでしまうので、生きるためにやることがあるから自由ではない。

食べなくてもよい植物は動けないし、土や水の無い場所ではやはり死んでしまうから、何でも好きに選べるわけではない。

問題を人に限定した場合、快適な温度で服のいらぬ土地があって、眠るのに心地よい芝生が広がっていて、その周りにはいろいろな果物が絶え間なく実り続ける森があって、綺麗な水もある。

そんな「楽園」と呼ばれるような場所があれば、人は自由だろうか？

与えられたままを受け入れているだけなら、自然ではあるけど、自由とは呼ばないだろう。

受け入れず、「他のものが食べたい」という意志が芽生えたなら、「生きるためには楽園を離れられない」という現実を前に「不自由さ」を感じるだろう。

一人ではなく家族で暮らしていたなら、「どれも食べられる実だから、どれを食べても同じ」と思う子はよくても、「それが欲しい」「それじゃなくちゃ嫌だ」と思う子は希望が通る・通らないという、人数分あるからOKにならない状態が生まれる。

「流れのままに」を受け入れている子は自由だろうか？

「自分に由来する」という意味なら、自由とは対極にある。

自分がないところに、自由は生まれない。

「わたしは〇〇したい」という意志があって、「それは可能か？」が問われた時、制約されていてできないか、自由が認められているか、結果が出る。

暴力が許された世界なら、なぐり合って「その果物」を奪い合うだろう。力の強いものが勝つ。

あるいは、なぐり合っている隙に食べてしまって、似たものとすり替える悪知恵の働くものが勝つ。

ロボットがロボットを生み出す世界になっても、自然のものは出来にムラができるから、「それがほしい」が起きる。

均質化された工場製品なら「どれでも同じだからどれでもいい派」が多数を占めるが、野菜や果物は「この品種」「この等級」「この部分」という「欲望」が起きる。

上下関係があれば、上が好きなだけよいものを食べ、下が余った少量を分け合う。

平等な世の中では、自由に選べる。しかし、平等であることと、選ぶことは、そもそも対立する概念なので、工夫が求められる。

もし本当に平等を望むなら、チケット制にして、「無作為に詰めたモノを配る」をすることに

なる。望むものが手に入るかどうかは、運次第。

しかし、そんなやり方をよいと考える人は少ないから、早いもの順にしたり、価格に差をつけたりして、なるべく欲しい人に欲しいものが手に入るようにする。

大根半分100円の場合、上下に分ける。何に使うかで、どちらがよいかは変わるけど、たいていは上が小さく、下が大きい。上の方が甘くて、繊維がなくて、おいしいからだと思う。

「並んだ順に選べます」にしたなら、早く来た人が有利。

「上150円、下50円」にしたなら、金額と用途次第で、どちらが先に売れるか決まるだろう。お金がなくて、なるべく節約しなければならない人は、選択肢が提示されているにもかかわらず、高い方は選べないから、常に安い方を買うことになる。お金持ちは、どんどん値上げされても好きな方を食べることができる。

違いに気づかなくて、与えられた環境をあるがままに受け入れていたなら平和だ。

違いに気づいて、「それが欲しい」「わたしのものだ」と言い出したなら、争いになる。

でも、「これでは不十分なので、あれを作ろう」という欲望は、生活の質を向上させる。

与えられたものを奪い合うから、醜い争いになる。

与えるために生み出す欲望を持ったら、自分も他人も幸せになる。新たな問題が生まれるだけだとしても、取り組み続けることが生きることなんだと思う。

奪うための労働は虚しいが、与えるための労働は生きがいを作り出す。

たとえば、最初にあげた楽園のような場所があって、何にもしなくても生きられて、好きなだけねて、好きな時に食べて、何不自由なく生き続けられたとしたら、満足だろうか？

老いていくこと、死ぬことをどう受け止めるのか。

愛を求めずにいられるのか。

「親から生まれて、出会って、愛し合って、子をなし、育てて、死んでいく」というサイクルと無関係に、ある時、成人した状態でポツンと一人の青年が出現する。

彼は老いることも、死ぬこともない。

生きるためにしなければならないこともない。いつでもできるから、いましなくてもよい。何もしなくてもよいが、何かをして喜ぶ誰かもいない。それでもなにかをしようと思うだろうか？

思えなかったからエバが生まれた。

そしてエバは、「それが欲しい」と言った。

楽園を追放されて、生きるために働かなくてはならず、子を産み育てなければならなくなった。そして子孫繁栄のサイクルが生まれた。

自然が与えてくれるものを奪い合うだけなら、今の繁栄はなかった。

「まだこの世に存在しないものを生み出す」という欲望があったから、かつての楽園のような状況を作り出した。

つまり、「自立する」ということは、与えられたものを奪い合う状態から抜け出し、与えることだ。

自分が何を与えられるか知って、実践する経験が求められる。

任された仕事を一人で完了する立場の「稼業の手伝い」なら、経験として積み上がっていく。しかし、「ロットを差し出す」などのやらなくても別に困らないことをしているだけなら、「与える力」は育まれない。悪くするとますます依存状態に陥って、自立から遠ざかる。自分で判断してないから。

勉強をしても、それは知識や技術を与えられているだけなので、「与える」という経験をしているわけではない。

課題ではなく、現実直結している本当の問題を解決したり、需要を満たしたり、必要を引き受けたり、何らかの成果を出さなければ、「与えた」とは言えない。

一人で依頼を受けて、働いて、結果を出す。

複数で分担して、結果を出す。

それはどちらでも構わない。でも「結果」を問う「相手」がいないと成り立たない。

なぜなら、自分に必要なことを全部自分でしているのではなく、代行してもらうかわりに、代行することで成り立つ社会制度の中に生きているから。

保護区では、大人には毎月労働の報酬としてお小遣いが与えられる。

働いていない子どもには、与えられない。

衣食住は与えられるから、与えられなくても不自由しない。自然のままに、あるがままに、流れのままに、受け入れる生き方をするのもよい。

しかし、何かに興味を持って、「それが欲しい」となったら、大人を相手に商売をしなければならぬ。

洗濯物をたたむとか、歌を歌うとか、「物やお金を引き出す工夫」が求められる。

「誰が何を必要としているか？」「誰が何を好きか？」などの顧客情報も欠かせない。

自分で探ってきたり、情報交換をしたりするだろう。

そういう社会経験を通して、「与えること」を実際に繰り返すことでしか、身につかないカンがある。

「大人のお客」対「子どもの商売人」という関係の小さな保護区という社会でコツをつかんで、子ども同士が平等にぶつかる寮生活を経て、大人の一員となり競争に参加する実社会に出ていく。

- 1 2 歳までに商売のコツをつかんで、
 - 1 3 ~ 1 5 歳までに自分を知って、
 - 1 6 歳で自立する、
- という流れを持っている。

今とは違う「特色」の部分なんだから、特にしっかり考えねばならないところなんだろう。

ララは、子ども時代、体が弱いから、体力が求められることには参加できない。

畑を手伝うとか、洗濯を手伝うとか、そういうことでお駄賃を稼ぐことはできない。

父親が喫茶店を営んでいるから、クッキーやチョコレートや紅茶などはたまに送ってくれて、お菓子には不自由してない。

欲しいのは本やタロットカード。ノートや鉛筆。

ソフィーはララに甘いから、お手伝いをしなくても欲しいものを買ってあげたいが、「それをしてはいけない」という暗黙の了解になっている。

だから、ボナ先生から譲り受けた初心者向けのタロットの本を片手に、お古のタロットカードを使って、本を片手に占いをすることでお駄賃をもらうのだろう。

1 3 ~ 1 5 の間の管理区の生活でも、3 ヶ月のライン勤務を免除されたり、寮の掃除当番を免除されたり、特別扱いされている。

そんな弱さを持つララが人の役に立てることと言ったら、やっぱり占いしかないだろう。

秘密をばらさない心の強さも求められる。

そうやって、「あの子は弱いからしょうがない。でも占いで役立っている」という具合に居場所を獲得していくのだろう。

弱いから保護区に戻ることを母は望んでいたが、ロロと出会って、「ロロが欲しい」という強い欲望を初めて持つ。

そして、アパートで一人ぐらしをしながら、父の店の片隅で占いの店を開く。端末を利用して、ネット鑑定もしている。

7 ~ 1 2 歳までボナ先生に教えてもらって、知識はある。

1 2 歳までは知り合いしか占ってなかったけど、1 3 歳から知らない人も占う経験をしている

。

すでに、自分の占いをどう思うか、「自分のことで精一杯」という状態ではなくなっているはず。

相手の心に寄り添う態度が身についているはず。

16～26までの間、それなりに商売として成り立たせられただろう。

もし、得られた収入で、口口を追って、自由区を旅する生活をしていたなら、何が理由で保護区に入ろうと思うのだろうか？

体が思うように動かない経験を繰り返して、「このまま死ぬかもしれない」という意識が強まる。だから、「次はない」「今、しなければ」という激しい情熱に動かされて、貪欲に刺激を求めて、口口のコンサートを見るために出掛けた先で、いろいろなものをみたり、いろいろなものを食べたりするのだろう。

国際都市にも、国内都市にもでかけているだろう。

借金することはないが、儲けたお金は残らず使ってしまう。

でも、進行性の病気ではないから、十分休養すれば長生きできると分かって、どう過ごすか迷いが生まれる。

いつでもできるとなったら、それほど旅に魅力を感じなくなる。

それでも口口の歌を聞くことは、最優先事項だったはず。なぜ、それをあきらめて保護区に行くのか？

ボナ先生やソフィーが危機的状況？

いや、他人が理由で入るのは不自然。占い師なら、自分の本音に従って決めることの重要性を分かっていたはず。

たぶん、口口を本当に愛していたから、お金で買える刺激を求めて何もしてない自分を恥ずかしく感じて、何かがしたくなっただろう。

じっくり腰を落ち着けて生きることを考えたら、自由区より保護区という結論に達したんだろう。

保護区に戻ることは決まっていた。

もう口口を見ることはないと思っていた。

それがお客として奇跡的に会えて、自分の占いを信じてくれる姿を見て、自分に自信を持ったと思う。

だから、「今日一日付き合ってください」と言えば、「あなたの子どもが欲しい」という意味があることを知っていて、言ったのだと思う。

体が弱くて、生理不順のララが妊娠する確率はすごく低い。

それでももし、子どもが生まれたなら、それは神さまからの贈り物だから大切にしよう、そう思って関係を持つ。

それだけじゃない。いろんな人の相談を受けて、セックスというものがどんなものか知らないことに、もどかしさを感じてもいたのだろう。

でも、好きでもないのに関係を持つのは嫌だから、本当に好きな相手に出会った時に、断られることを覚悟の上で言ったのだと思う。

自分の占いを必要としてくれて、自分を女として受け入れてくれたから、それからどんな困難な目に遭っても、「立ち上がる自信」につながるんだろうな。

人々の心に寄り添うことを求め続けられるのは、口口を愛しているから。

27～53まで、子どもを産み育てて、ボナ先生の後を継いで、ヒメカという後継者も育てて、「わたしは生きた」という自信を持ったから、口口に再会して、プロポーズされた時に、ともに生きる決意をするのだろう。

最初の出会いの時は、自分は口口にふさわしくないと思っている。

それが、隣に立つ自信を持ったから、葬儀歌手の依頼をする。

そして、最期を考えて、口口のそばを選ぶ。

愛を与え合いたいと願う。

欲望のまま、刹那的に生きてきた16～26の時代があるから、27～53までの他人のために生きる姿に真実味が生まれるのかも。

一人一人と真剣に向き合う姿を書きたいなら、口口に秘密を手紙で打ち合えるのはおかしいだろうか？

手紙形式を考え直した方がいい？

でも、「誰」と特定できない形で、物語るなら、手紙形式でもいいかもしれない。

趣味小説なんだし、読み切り短編みたいな感じの手紙を書くのも面白い。

そこら辺は、もっとララの人物造形をしっかりと作ってから考えよう。

ハーミットは、欲がない。社会経験もない。ただ求められるままに勉強してきただけ。生かし方を知らない。

だから、試験は受かるけど、面接で落とされる。

自分は何を与えられるだろう？

わたしは何を欲するだろう？

手紙を読んで考えるうちに、そういう部分に変化があらわれるんだろう。